
忘れられた森

月檻 楔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

忘れられた森

【Nコード】

N21590

【作者名】

月檻 楔

【あらすじ】

異界の森に住む人間嫌いの人間。そして彼女を補佐する狼と鷹。誰とも必要以上に関わらず、そのまま寿命で死ぬはずだった（人生プラン的な意味で）のに。
狂いが生じてしまった。

人間嫌いの魔女の独白

私はそういう生来人間なのだ。ひねくれている。と、言うより人間が嫌いなんだと思う。この森に住んでからはそれが特に顕著である。人間と会わないという選択肢は、私が思っていたよりも楽だったようだ。息苦しくない生活に、自然に満ち溢れてた世界。柔らかな空気に清涼な気温。

まあ、あれだ。

簡単に言えば。私は異世界にぶっ飛ばされたことをあまり後悔していないのだ。普通の人間だったら嘆き悲しみ絶望に咽び泣くところを私は気楽に受け入れた。

元々、人混み嫌いの人間嫌いの私である。前述の通り異世界にぶっ飛ばされ、咽び泣くことなんてせずに嬉々として探索していたものだから、今思えば我ながら呆れる。食べ物に毒があつて死にかけたことなぞ一度や二度では飽き足らない。

茸は避けた。全力で避けた。茸イコール毒のイメージが抜けなかったためだった。木の実が主食。そんな質素な食生活も、二人の同居人 否、二匹の同居狼と同居鷹によつて救われた。彼らによつて私の食生活は大幅に改善されたのである。感謝しても足りないくらいに。

初めてこの世界に来て見た空は真紫。夕方かと思えばそれが朝なのだから本当にろくでもなく素晴らしい世界である。昼は普通の空色に夜も変わらない。

月が奇妙に色を変化させるものだから開いた口が塞がらないとい
う経験も体験しちゃったり。

それでも、この世界は素晴らしい。

だから私はこの世界で生きることを決めたのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2159o/>

忘れられた森

2010年10月9日23時10分発行